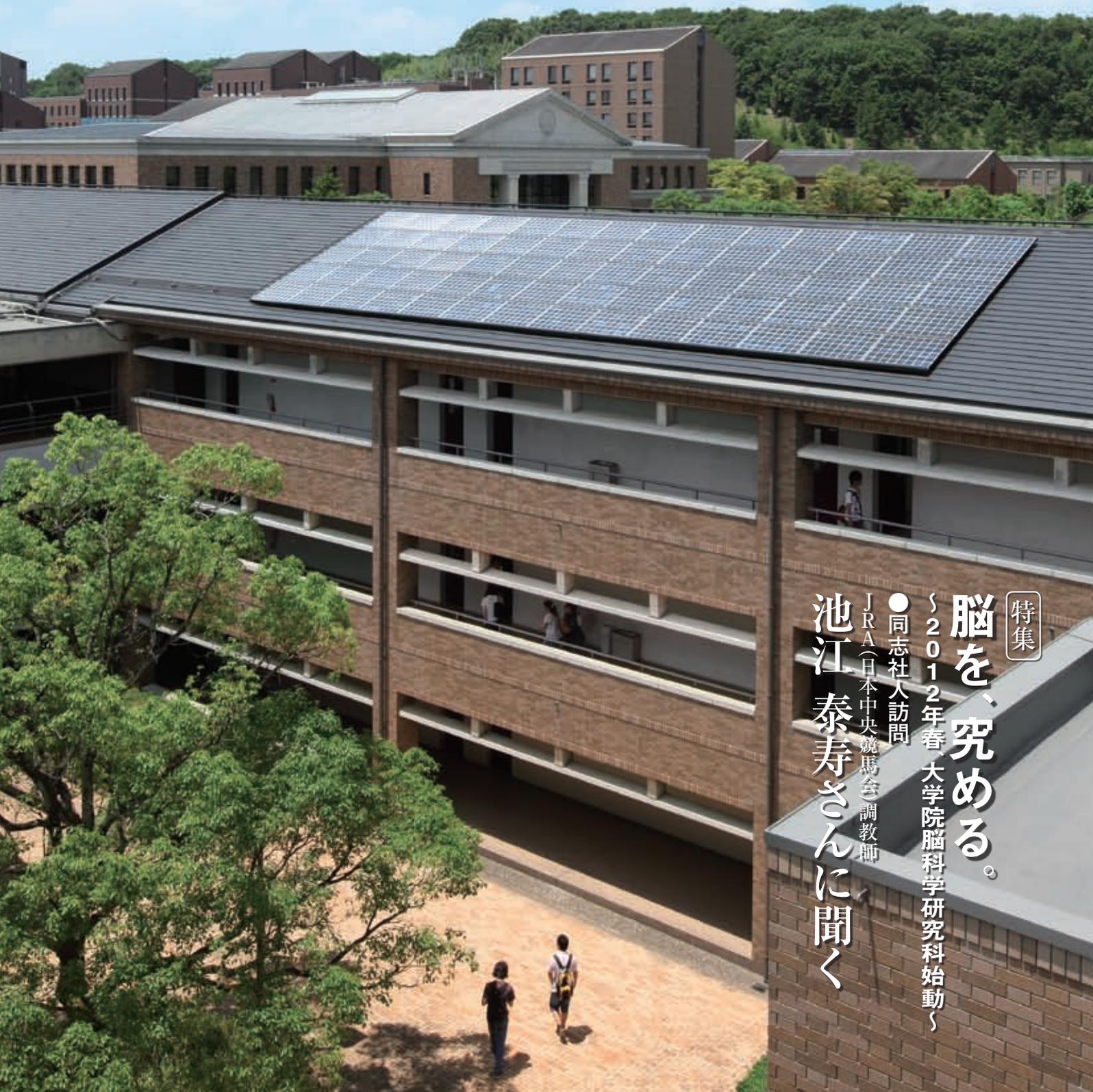


One purpose

FOR BETTER COMMUNICATION



同志社大学通信
DOSHISHA UNIVERSITY



特集

脳を、究める。

〜2012年春 大学院脳科学研究科始動〜

●同志社人訪問

JRA(日本中央競馬会)調教師

池江泰寿さんに聞く

『ONE PURPOSE』は在学生・卒業生の皆さんとのコミュニケーションをはかることを目的として発行しています。ささいなことでも結構ですので、どしどし広報課までご意見・情報をお寄せください。



特集

脳を、究める。 ～2012年春、大学院脳科学研究科始動～

ゼミ探訪 学びの時間	7
法学部 法律学科 神谷 遊 ゼミ	
同志社の研究は今	9
古都ローマ・京都歴史遺産研究センター 中井 義明 文学部教授	
2010年度 大学決算について	11
キャンパス整備事業ニュース—烏丸キャンパス編—	13
『新島八重と同志社』特設サイトオープン	14
CAMPUS NEWS	15
会津若松市長が来学／「同志社フェアin函館」開催／オープンキャンパス2011開催／硬式野球部、関西学生野球優勝／ソフトテニス部、全日本大学ソフトテニス王座決定戦優勝／留学生が祇園祭山鉾巡行に参加／尾木直樹氏 新入学生歓迎特別講演会／「博士後期課程若手研究者育成奨学金」制度を新設／MA Sheffield-Doshisha Law/Politics ダブル・ディグリープログラム 協定締結／同志社大学震災救援義援金のご報告／新任教員紹介／2011年度 卒業式・学位授与式／2012年度入学式／本学教員執筆図書紹介	
留学生紹介	19
ヨナス・サンデルさん(工学研究科 工業化学専攻 国際科学技術コース 博士課程(前期課程))	
INTERVIEW ～同志社人訪問～	20
JRA(日本中央競馬会)調教師 池江 泰寿さんに聞く	
MY JOB, MY LIFE ～シリーズ 私と「仕事」～	23
・笹原 貴彦さん(2005年 商学部卒業) ・山下 吏良さん(1995年 文学部文化学科心理学専攻卒業)	
ANNOUNCEMENT	25
MY PURPOSE	27
第31回全日本大学ソフトテニス王座決定戦で初優勝～関東の強豪校を倒す目標が叶った～ 柴田 章平さん(スポーツ健康科学部4年次生)	

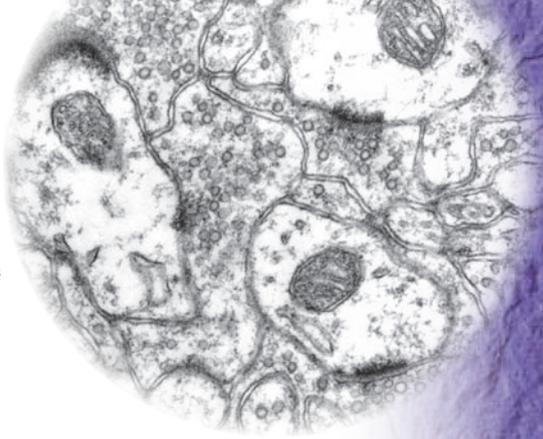
表紙の情景 [知真館1号館 太陽光発電パネル]



知真館1号館の南側の屋根に設置されている太陽光発電パネル。4カ所に分けて計400㎡が取り付けられており、同館内の蛍光灯約2,200本のうち最大1,562本分の電力を発電することができる。年間発電電力量は、5万kWhと予測される。

京都府が「けいはんな学研都市の立地施設に先進的な新エネルギー・省エネルギー技術・設備の導入を進める「けいはんなエコシティ環境未来都市創造事業—けいはんな学研都市チャレンジ25—」の一環として、2011年1月に設置された。

1階ピロティには太陽光発電パネルによる発電量や電力消費量を表示する情報パネルがあり、「見える化」することで学内の環境意識を高める狙いがある。



特集

脳を、究める。

2012年春、大学院脳科学研究科始動

2012年4月、大学院に

脳科学研究科発達加齢脳専攻が新設される。

人の精神の基盤であり、そのはたらきの解明が

人類の長年の夢である「脳」。

基礎科学として広い裾野を持つ脳科学は、多くの臨床医療に貢献し、

文理系の枠を超えて広範な学問領域や関連産業にも大きな波及効果を持つ。

※5年一貫制博士課程の独立研究科、

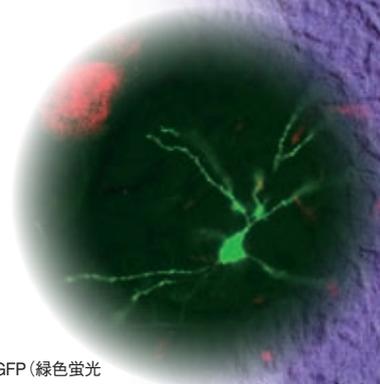
国際的に活躍するスタッフによるオーダーメイド教育といった特色を有し、

次世代を担う脳科学研究者の輩出を目的として開設される脳科学研究科について、

その学びの内容や意義、求める学生像などを担当教員に聞いた。

※前期と後期の区分を設けず5年間一貫して教育を行う博士課程。

修了者には博士学位(博士(理学))が授与される。なお、修士学位は授与されない。



遺伝子組み換えGFP(緑色蛍光タンパク)で可視化したニューロン



MRIによる脳の画像診断：静的状態測定による非侵襲脳内観測とfMRIによる動的状態測定を用いる脳の機能解明

脳科学研究科の「学び」を語る



橋本 ● まず研究科の概要を教えてください。

高橋 ● 脳科学研究科は、学研都市キャンパスの快風館を拠点として、実験をベースとした基礎研究を行います。脳科学は簡単に言えば、脳の仕組みがどうなっているのかを探る研究です。この研究科には、それぞれの研究を国際的レベルで展開している8名の教員がおり、研究との密接な関連の下に大学院教育を展開します。大学院では、学校のように、知識を与えて、試験で覚えさせるのではなく、実験やセミナーを通じて、研究の仕方を伝えることが中心

になります。今回、脳科学研究科が掲げた目標は、学生が自ら研究テーマを選び、実験をデザインして、論文を執筆するまでの一連の研究活動を行う力を養うことにあります。つまり、この大学院は、専門「技術者」にとどまらない「研究者」を育成することを目指しています。自然科学の研究者には、想像力、観察力、企画力、洞察力、統合力、発信力がいずれも必要不可欠ですが、これらの実力を必要とするのは研究者だけではないため、基礎研究の実力をつけた修士生は、多方面で活躍することができ

ます。「研究者」を育成するためには、理系文系の枠を超えた教育が必要です。また、科学に国境はないので、英語で自由に読み、書き、話す力をつける必要があります。

橋本 ● 僕は機械工学を専攻していますので、人や社会の役に立つことを目標に研究していますが、基礎研究はその成果が分かりにくいのではないのでしょうか。

高橋 ● それは、科学と技術の関係にかかわることですね。よく目にする「科学技術」という言葉には、科学は技術に応用されて人の役に立たなくてはならないという意味が込められています。実際、脳科学の基礎研究が脳神経疾患の治療や、新世代コンピュータの開発に役立っていることは確かです。しかし、他の自然科学者同

高橋 智幸

【生命医科学部・生命医科学研究科教授】

様、基礎脳科学の研究者は、役に立つかどうかはさて置き、未知の真実を明るみに出すことを目指しています。このことを説明するため

に、球根の絵を描いて見せることがあります。この絵を見ても何かが分からない人がほとんどですが、チューリップの花を描き足せば、誰でも、それと分かります。科学と技術の関係にも似たところがあって、科学を球根、技術を花に例えると、技術は、科学の上に咲いた花ですから、球根から切り離したら枯れてしまいます。一方、球根は花が咲かなくても増え育ち、大きな技術発明が開花することがあります。「役立つかどうか分からない科学」を大切にすることは「目に見えない心」を大切

切と考える同志社大学の理念にも通じることですね。

橋本 ● 脳科学研究科ではどういった学び



脳科学研究科は、次世代の脳科学研究を支える人材を養成するという目的を持った独立研究科として開設される。ここでは実際に学生たちが何を学び、どのような能力を身につけていくのか。学部で学ぶ学生を代表して、理工学部エネルギー機械工学科4年次生の橋本達也さんが、来春、脳科学研究科教授に就任する高橋智幸生命医科学部・生命医科学部教授に聞いた。

方をするのでしょうか。

高橋 ● 入学すると、複数のラボを2カ月ずつローテーションしてから正式にどの研究室に所属するかを決めます。その後も、科目選択、学位論文のテーマ、修了後の進路などを、教授、准教授や若手研究員のアドバイザーと相談して決めることとなります。授業は、英語教材を自主学習して、まとめた内容を発表し、ディスカッションを行って理解を深めるというチュートリアル方式を大幅に取り入れます。この授業を通じて、情報を読み取り、選別、統合して、説明するという、研究に必要な実力を身につけていきます。また、高年次の選択科目では、社会の様々な分野から講師を招き、ディスカッションを通じて学び、企業のインターンシップに参加して、修了後の進路を考えるような機会を提供します。

橋本 ● 僕のように理工学部からでも入学はできるのでしょか。

高橋 ● はい、勿論です。生命医科学部卒業見込者にはGPAによる学科試験免除の制度がありますが、それ以外は、学内はもとより、国内、国外の様々な学部から広く受け入れます。選考のポイントのひとつは英語力です。研究の出発点に立つための英語力を求めます。初年次の定員は10名



ですが、修士課程修了者は、3年次転入学試験を受けることができます。

橋本 ● 脳科学研究科で学んでいくには、英語力のほかにどのような力が必要ですか。

高橋 ● 新島襄がモットーとする「自立心」と、初心を継続させる強い意志が必要です。大学院では、様々な研究方法を身につけて、前人未踏の自然科学の道に踏み出すこととなりますが、この道は自由で楽しいものであると同時に、様々な困難がつきものである、前向き思考、勇気、実行力なども必要です。入試では、知識の多寡は重要視しません。

橋本 ● 基礎となる学部を置かない独立研究科にしたことによるメリットはありますか。

高橋 ● 学部の枠に縛られずに横断的な教育が可能なことです。本研究科の授業は、8部門長を中心として、生命医科学部研究科、心理学研究科、神学研究科、グロ-

バル・スタディーズ研究科の学内教員、および、京都大学工学部、薬学部の教員、企業研究員の協力の下に行われます。「科学と社会」では、例えばイスラム社会について話題が提供され、学生は対話とディスカッションを通じて異文化を理解するきっかけをつかみます。同質的な日本社会に育って、国際社会で活躍する研究者になるためには、異文化を理解しようとする姿勢が大切なのです。

橋本 ● 脳科学研究科で学ぶことによって、どのような力がつくのでしょうか。

高橋 ● 基礎実験研究の体験と授業プログラムを通じて、

研究以外にも通用する実力が身につくようになっていきます。先に述べた研究力のほかにも、目標を設定する力、目先にとらわれず将来を見通す力、他人の発表に反応して質疑応答する力、話の要点を把握する論理力など、この世界でも必要な実力を身につけた修

了生は社会の様々な分野で活躍することができます。基礎的な実力を身につけた後、海外で研究したい、あるいは企業の研究所へ行くたいという人には、その目標に向けたキャリアパスを支援します。

橋本 ● 脳科学研究科が目指す教育についてよく分かりました。本日はありがとうございました。

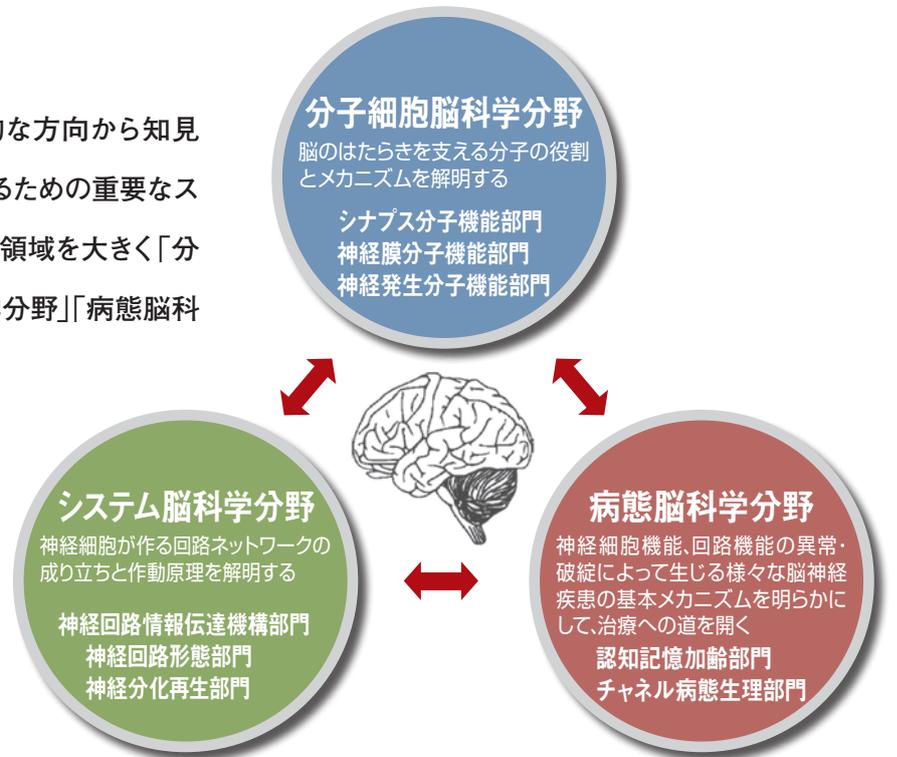
橋本 達也 さん

(理工学部エネルギー機械工学科4年次生)

「脳」をめぐる3分野からのアプローチ

分子、細胞、神経回路といった多層的な方向から知見を積み重ねていくことが、脳を理解するための重要なステップだ。脳科学研究科では、研究の領域を大きく「分子細胞脳科学分野」「システム脳科学分野」「病態脳科学分野」の3つに分け、それぞれに複数の部門を配置。3分野8部門による知的クラスターを形成し、教育・研究を進めていく。研究の方向性、求める学生像などを、各分野の担当教員*が語る。

*2012年4月、脳科学研究科移籍・着任予定



アルツハイマー病の治療に熱意のある人を歓迎したい

井原康夫

〔生命医科学部・生命医科学研究科教授〕

言葉の通り、脳に病変が発生した時の状態を科学的に解明することが、病態脳科学分野の研究の方向性です。私の専門は自覚症状のない

まま神経系が病気に冒される変性疾患で、代表的な例がアルツハイマー病です。病態の研究は一般的にメカニズムの解明からスタートし、それが進むと

具体的な治療法を考える段階に移ります。アルツハイマー病は、1906年に最初の症

例が報告されてから100年の歳月が経過する間に多くの研究成果が示され、現在では

治療法を考える段階に来ており、近い将来、治療や予防が可能になると期待されています。私の研究室では、アルツハイマー病の発症

に深い関わりを持つアミロイドという線維タンパク質を生成するシクターゼという

酵素と、神経原線維変化を構成するタンパク質のタウ、この2つの物質に的を絞って研究

を行っており、学生はどちらかのグループに属して研究を進めていくこととなります。

アルツハイマー病の研究をしてみたい、治療法を開発したいという熱意がある人を歓迎します。最初の2年間は躰くことも多い

と思いますが、研究室で多角的に物事を考え、学生同士や私たち教員とディスカッションを重ねることで成長していけるでしょう。入学時の強い気持ちを5年間持ち続けて、自分なりの成果を生み出してくれることを期待しています。一方、そうした学生に対する私たち教員の仕事は、どのように研究を進めるかを伝えていくことにあります。研究というのは文化の継ぎ目を作ることで、私たちが自ら培ってきた経験を1人ひとりの学生に伝え、受け継いでもらわなくてはなりません。また、私たちの本来の役割は研究者を養成することですが、修士生の半数以上は一般企業の研究所に入り、実社会に役立つ形で研究の成果を活かしてほしいとも思っています。

病態脳科学分野

好奇心を持って自らテーマを見つけて出すことがスタート

元山 純

【生命医科学部教授】



私が主に研究しているのは、母体の中で脳がどのように形成されていくかということです。分野の名称に「分子」とあるのは、特定の分子にフォーカスして、その分子の機能を通して脳の発生や発達を研究していくからです。分子そのものが具体的にどのような働きを正常に機能するかという点が重要なポイントです。いわば分子レベルで脳を解明するということです。

教育のプロセスとして、学生には研究テーマを自分で模索してもらいたいと思っています。研究室が持っている技術やリソースを

活用しつつ、学生自身の興味をコアにして伸ばせるものを自分で見つけて出してもらうことが最初のステップだと考えています。脳科学研究科の大きな役割として、修了後は様々な分野で貢献する人材を育てることがあります。単なる専門家を養成するのではなく、そこから何が一番重要な問題で、自分が対峙したいと強い思いを抱く問題は何かを見つけて出す能力です。その意味でも私の研究室では、研究テーマを探してもらうところから始めてもらうつもりです。また、すべてにおいて重要なのは好奇心です。科学は社会を変えていく大きな原動力ですから、好奇心を持つことがスタートインポイントです。自分自身の好奇心を大事にすることができると、自分自身に向き合っている人、自分自身を客観的に観察した上で好奇心をサイエンスに活かしたいという意欲のある人、そういう人であれば、私は教えるというよりも一緒に仕事をしたいと思っています。そして、エネルギーがあって自分だけがやりたいというものを持っている人には、それを最大限伸ばせる環境を与え、研究力を国際スタンダードに引き上げる、それが私たちの役割だと思っています。

真実を知るときめきを共有していきたい

藤山 文乃

【京都大学大学院医学研究科

高次脳形態学教室准教授】

私は神経内科専門医としてパーキンソン病やハンチントン舞踏病の患者さん達を担当していた頃、説明のつかない症状に困惑していました。動きたいのに動けない。動きたくないのに動いてしまう。この謎に満ちた症状を引き起こしているのが大脳基底核という脳領域です。さらに近年、大脳基底核は運動調節だけでなく、「学習にもとづいた行動選択」という重要な役割を担うことも

わかってきました。しかしながら、運動と学習、この二つを実現する神経回路（ニューロサーキット）がどのようなものなのかはわかっていません。私はこの謎に迫るために基礎医学に移り、新しい電子顕微鏡技術や分子遺伝学を応用することで大脳基底核回路の解明に取り組んできました。現実には神経変性疾患の多くが、「どのニューロサーキットがどのように変化しているのか？」そもそも本来あるべきニューロサーキットはどのようなものか？」が不明なままです。脳科学研究科では脳領域や疾患の枠組みを超えて、ニューロサーキットの原理を追究し、臨床にも貢献したいと考えています。本研究科の各分野のエキスパートの先生方と一緒にさせていただくことによる新しい展開も楽しみです。また、研究の面白さ、本当のことを知るときめきを若い人たちと共有していきたいと思っています。研究生活は七転び八起き。失敗から新しいものを構築する醍醐味もありますから、まずは興味を持って入ってください。脳科学は多様な視点を要求される学問ですので、女子学生にも参加してほしいですね。研究を続ける上での悩みや困難を共有し、一緒に乗り越えていく研究室を作りたいと思っています。



法律や判例を絶対視しないで、自分なりの価値観を身につけてほしい

至誠館34番教室。ゼミ用としては広い教室に集まった学生は30人。1人ひとり名前を呼んで出欠を確認してから始まる。多人数のゼミらしいスタートだ。

人数が多いこともあり、活動は約5人で構成する班単位が基本。取材に訪れた日は、5班が「暴力団組長の使用者責任」をテーマに報告を行っていた。

配下の組員が不法行為を犯した場合、組長に使用者としての責任を問えるかが主題で、暴力団の暴力行為や「しわざ」を「事業」として認めるかどうかなどが議論の焦点だ。配布したレジュメに沿って、1人ずつ教壇に立って説明した後、報告内容に関連して検討すべき課題を提示し、班ごとの話し合いに移った。20分ほど討論した内容を、1〜3班が自分たちの見解として発表。さらにそこで提示された新たな課題について、もう一度班ごとに検討を加える。その結果を、今度は残りの4、6班が発表した。どの班を見ても、積極的に発言し、活発に話し合いがされている。

遭った時の損害賠償、離婚や相続など家庭内のトラブルもすべて民法の分野なのです」と説明する。

法学部のゼミは2年次の秋学期からスタートし、3・4年次へと続く。年次の変わり目には他のゼミへの移動が認められてはいるが、神谷ゼミのほとんどの学生は最初に登録したまま卒業まで継続するという。

「4年次のゼミは、最初からこの30人で進めてきました。ゼミの登録に人数制限を設けてはいませんが、私が指導できる人数に限りがありますから、30人以上になると断るケースも出てきます。エントリーシートに自己PRや将来の希望を書いてもらい、書類選考をしています」。

神谷ゼミの主旨は、民法の分野の様々な判例を取り上げ、社会の中でどのような問題が起きていて、どういった解決策が提示されているのかを研究していくこと。神谷教授が民法の分野でも特に家族法を専門にしているということもあり、スタートしたばかりでまださほど深く勉強が進んでいない2年次の秋学期は、家

族法を中心に扱い、身近で比較的イメーヂしやすい家族関係をめぐるトラブルについて、自由に意見交換をすることから始まる。3・4年次になると、家族法に限らず財産法なども含めて広く一般に民法の勉強をしていく。具体的には、班ごとに関心のある判例を取り上げ、それについて検討を加えていくという手法だ。

大所帯のゼミを指導しているのは、民法が専門の神谷遊教授。「民法の現代社会における機能を勉強しているゼミです。民法というのは、法律の中でも基本となる法律であり、日常生活に最も密接にかかわり合う法律でもあります。例えば、コンビニでお弁当を買うのは売買契約で民法の問題ですし、アパートを借りて住むという賃貸借契約もそうです。事故に

進んでいない2年次の秋学期は、家

ちなみに、班の振り分けはくじ引きで決め、選り好みはできないという。ただ、法学部の場合は、卒業後の進路が大学院進学、一般企業への就職、公務員試験受験と大きく3つに分かれ、それぞれで進路に向けて忙しくなる時期が異なるため、その辺りの事情は考慮して構成して





いるそうだ。

「最終的には判例の勉強ではあるのですが、背景にどのような事情があるのか、

どのような価値観があるのかを理解した上で、活発な意見交換を行ってくださることを期待しています。民法の勉強は日常生活に密着しているだけに、民法という切り口で今の社会のありようを学ぶという点でもあります。判例に一定の価値観が示されていますが、それは絶対的なものではありません。時代や社会的状況などにより変遷するものですから、そういったことも含めて勉強し、自分ならどう考えるか、お互いに意見をぶつけあうことで自分なりの価値観、

人生観を形成し、磨

いていってほしい」と神谷教授は言う。

ゼミ生の中から、6人に卒業後の進路、ゼミで得たことなどを語ってもらった。

ゼミ長の山内綾子さんは大学院法学研究科に進学予定だ。「班単位で活動することで、苦手だった人付き合いができるようになる



りました」と言う。「そんな方向から見られるんだとか、そういう価値観もあったのか」という発見が毎回あります」と話すのは、法科大学院に進学し、弁護士を目指している石田明子さん。尾崎達哉さんも、法科大学院から弁護士への道を目指す。「判例を踏まえて考えていく中で、いろんなものの見方があることに気づき、それを受け入れようと自分でも意識するようになりました」。法律事務所に入る中村志穂さんは「司法書士と行政書士、できれば両方の資格を取得したい」と、将来の目標を語る。ゼミでは、「自分の意見を出せるようになる」と楽しくなってきた「そうだ」。

一方、民間企業の法務部門に就職が決まっているのは、梅田拓也さんだ。「みんなと話し合う中で判例としっかり向き合い、理解を深めていけるようになりました。判例だけが答えではないという神谷先生の言葉は、これから実社会で法律に向き合っていく自分にとって非常に響きました」。法学部のもう一つの主な進路、公務員を志望している菊池翔さんは「班のメンバー」と課題を検討する中で、それぞれの意見を尊重しながら調整し、お互いが納得できる妥協点を見つけたように感じるようになった。結論だけではなく、答えにたどり着くまでのプロセスにも目を向けるようになりました」と話した。



なく真面目に取り組んでいる姿に驚いた」と言うと、神谷教授は「課題に真正面から向き合うタイプの学生が多いかなとは思いますが」と、目を細めた。

日欧の古都、京都とローマの歴史遺産研究を通して近代の歴史意識を探究する

同志社大学が位置する日本の古都・京都とヨーロッパ文明の源流であるイタリア・ローマ。それぞれの都市の歴史、とりわけ歴史の過程で変化していく都市景観、そこに育まれてきたそれぞれの文化と伝統。それらの歴史遺産は近代においてどのように意識されてきたのか——。連携するローマ大学に若手研究者を派遣し、遺跡の発掘調査や復元など、同大学との共同研究を進める拠点として、2011年1月に誕生したのが、「古都ローマ・京都歴史遺産研究センター」である。共同研究の具体化、シンポジウムを含む成果発表など、日本側の研究活動を主導するセンター長、中井義明文学部文化史学科教授に、研究センターの意義や活動内容、目標などを伺った。



古都ローマ・京都歴史遺産研究センター
中井義明
〔文学部教授〕

同志社大学大学院文学研究科は2010年1月、ローマ大学サピエンツァ人文学部考古学科のパオロ・カラッファ教授らの協力を得て、「古都物語 京都、奈良、ローマ、そしてポンペイ」と題した国際シンポジウムを開催しました。このシンポジウムを基礎に、同志社大学文学研究科文化史学専攻とローマ大学サピエンツァ人文学部考古学科との間で、若手研究者の派遣と共同研究の実施に関して合意しました。そして、日本学術振興会より「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム」に基づく事業承認を得たことから、ローマ大学との共同研究の母体となる研究機関として、「古都ローマ・京都歴史遺産研究センター」を立ち上げたのです。

従って、当センターの役割は、一義的にはローマ大学に若手研究者を送り出すことです。ただ派遣するのではなく、その研究活動を手厚くバックアップしなければなりません。派遣前の事前レクチャーから帰国後の成果報告に向けての助言と協力、さらには将来の研究発展のための研究環境の整備を行うことも必要です。また、これはわれわれ自身の研究課題でもありますが、古代の遺跡が近代社会の中でどのように利用されてきたか、あるいはどういう風により作り替えられてきたのかなど、近代における歴史遺産のイメージ形成について、ローマ大学との共同研究を通して明らかにしていくことも、重要な役割の1つに挙げることができます。

A: 2010年1月の国際シンポジウム。参加者は500名を超えた。



古代の遺跡はナシヨナリズムと非常に密接に結びついています。ギリシア・アテネにあるアクロポリスのバルテノン神殿には、かつてモスクがありました。しかし、現在は撤去されてしまっています。現在、1人の若手研究者を派遣しており、10月には2人目を派遣します。そして、3人目に考えている研究者は、ルネサンス時代の絵には、その当時の遺跡が描かれていす。しかしそれは、単に風景として描かれているだけではなく、そこにもある種の意味を与えられています。ルネサンス時代の人々にとって古代の建物はどういう意味があったのか。1つには遙か昔の祖先の偉大な文明であり、憧れの対象でもあったでしょう。自分たちがその水準に復帰していかなくてもいけないという目標として存在したのかも知れません。このようにそれぞれの時代において古代の遺跡がどういった意味を持っているのかを研究し



B



C



D

B: ローマ大学。古代ローマ文明研究の世界的拠点であり、近年は考古学の情報データベース構築に精力的に取り組んでいる。

C: 調査予定地区(オステア)にあるセラピス神殿の集合建築。様々な時代の建築工法がみられる。

D: オステアにおける住宅地区。壁体建築の違いをセンターのスタッフと検証。

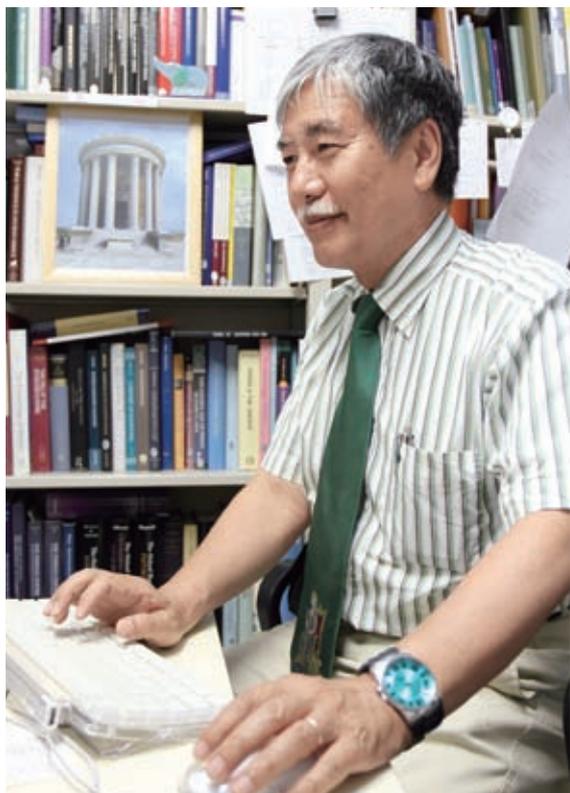
対象になるのです。ローマの古代の姿をただ復元するだけではなく、イタリアが統一された時にどのような役割を果たしていたのか、ムッソリーニの時代にどうだったのか、現代ではどうなのか、それぞれの時代相の中で見ていくことが、ローマ大学との共同研究の1つの方向性なのです。現在、1人の若手研究者を派遣しており、10月には2人目を派遣します。そして、3人目に考えている研究者は、ルネサンス時代の絵には、その当時の遺跡が描かれていす。しかしそれは、単に風景として描かれているだけではなく、そこにもある種の意味を与えられています。ルネサンス時代の人々にとって古代の建物はどういう意味があったのか。1つには遙か昔の祖先の偉大な文明であり、憧れの対象でもあったでしょう。自分たちがその水準に復帰していかなくてもいけないという目標として存在したのかも知れません。このようにそれぞれの時代において古代の遺跡がどういった意味を持っているのかを研究し

一度は失ったものの、造り直して観光の対象となつてくる歴史遺跡の例はたくさんあります。例えば、金沢城の五十間長屋は、明治の初めに火事で失われているのです。石川県が幕末の頃の姿で復元しました。金沢にとって1つの栄光の時代が加賀百万石で知られる前田家の時代ですから、その栄光の復活を狙いに復元したのです。いつか同志社大学の明治の建物も、そうした意味を与えられていくのかもしれない。日本の近代化という視点で取り上げられる時代が来ると思っています。

派遣される若手研究者は、カラーファ教授らが開発した考古情報システム(GIS)——文献資料や考古学のデータをインプットし、過去のある時点での都市の様相をコンピュータ上に復元するシステムを利用して、ローマやイタリア各地の地方都市の歴史遺産を研究すると同時に、北アフリカやギリシア、トルコなど、かつてローマ帝国の属州であった地域における古代ローマ都市の発展とその歴史的評価について

も調査研究を行います。GISはデータを基にしているので、遺跡に与えられたイメージや意味づけを払拭し、当時の姿を忠実に再現することができます。さらに、遺跡の様相が分れば、土地開発計画にも活かすことができるのです。

これらの共同研究による成果は研究センターのホームページ(<http://shark.doshisha.ac.jp>)に掲載するとともに、シンポジウムなどを通じて積極的に一般に公開していきます。そして最終的には、書籍として報告書をまとめる予定です。当センターの活動は、文化情報学部など学内で学部横断的に広がる可能性がありますが、国内でも同志社大学の枠を超えて活動する可能性もあります。幅広い連携と活動により、このセンターを母体として、次の世代の研究者を育てたいと考えています。



2010年度

大学決算について

財務部 経理課

2010年度大学決算は、2011年5月12日開催の大学予算委員会および大学評議会、5月28日開催の法人理事会で承認されました。

2010年度の教学組織に関する改革では、これまでアメリカ研究科が蓄積してきた教育・研究を継承発展させ、アメリカ研究、現代アジア研究、グローバル社会研究の3つのクラスターから成るグローバル・スタディーズ研究科を今出川校地に開設しました。また、京田辺校地では、スポーツ健康科学部の大学院として、実社会に対応できる能力を有する高度専門職業人や卓越した研究者を養成するスポーツ健康科学研究科を設置しました。

教育研究の充実に向けての取り組みとして、公的機関による様々な教育研究支援事業に採択されました。日本学術振興会が実施する「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム」に、「歴史資産と近代国民的歴史意識の形成」および「グローバルイノベーション研究・教育ネットワークによる若手研究者の頭脳循環力の涵養」が採択され、若手研究者が世界の多様な研究課題に挑戦する機会が拡大されました。また、文部科学省の「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に「統合的電力・通信社会環境の形成プロジェクト」、「大学等産学官連携自立化促進プログラム」に「知的財産活動基盤の強化」がそれぞれ採択されました。

地域に根ざした主な取り組みとして、京田辺校地では「同志社京田辺祭(クローバー祭)」をはじめとした京都府京田辺市との地域連携行事を展開し、今出川キャンパスでは生涯学習型観光プログラム「楽洛キャンパス」にて公開講座を実施しました。

将来に向けての改革では、同志社大学の国際主義を推進する事業として、2011年4月開設の「グローバル・コミュニケーション学部」(京田辺校地)および「国際教育インスティテュート」(今出川校地)の設置準備に取り組んだほか、文系学部の一貫教育体制構築に向けての今出川キャンパス移転整備事業として、同志社中学校舎跡地での新校舎建設がスタートしました。また、同志社大学の附属校として2011年4月に開校した同志社国際学院の校舎を京都府木津川市に建設しました。

上記のとおり、2010年度は、従来から継続している国際化の推進や大学院教育改革等を中心に必要な投資を行いました。支出面においては、経常的な教育研究経費の節減や優先度の高い施設・設備関係事業費の執行による支出の抑制がありましたが、同志社国際学院用地の取得に伴う固定資産の受贈等により予算と比較して増額となりました。一方、収入面では、着実に入学志願者数を確保したことによる入学検定料の増加や、寄付金や補助金、事業収入など外部資金の獲得を継続的に取り組んだことにより、予算よりも増収となっています。

以下、収支計算書に基づき主な収支の内容について説明します。

収入の部

学生生徒等納付金は302億円で、帰属収入に占める割合(学納金比率)は72%と大きな比重を占めています。

手数料は18億円で、入学検定料が主なものです。

寄付金は21億円で、教育研究施設等整備資金寄付金、奨学寄付金、寄付教育研究プロジェクトなど教育研究活動への寄付金、奨学事業への寄付金、国際学院用地や機器備品などの現物寄付金を受け入れました。

補助金は41億円で、国庫補助金が主なものです。この大部分を占めるのが私立大学等経常費補助金で、一般補助18億円、特別補助16億円を受け入れています。その他の国庫補助金では、施設設備対象の補助金として研究装置、研究設備などの採択を受け、さらに戦略的な国際化拠点の形成を目的とした国際化拠点整備事業費補助金(グローバル30)、教育研究高度化のための支援体制整備事業等を実施するための研究拠点形成費等補助金、教育G Pなどの大学教育・学生支援推進事業を実施するための大学改革推進等補助金などを受入れました。

資産運用収入は10億円で、各種引当資産の運用収入および預金などの受取利息・配当金、施設設備利用料収入などです。

事業収入は7億円で、企業からの受託研究費などの受託事業収入、補助活動収入および付属事業収入が主なものです。

雑収入は7億円で、私立大学退職金財団からの交付金収入が主なものです。

繰出金は6億円で、法人内諸学校からの資金調達額の返済額が主なものです。

分担金は1億円で、法人業務に係る法人内諸学校の負担分です。

当期固定資産除却額は25億円で、機器備品の償却期間完了に伴う除却額などです。

当期末未払金は2億円で、固定資産取得に係る未

払金額を今年度の基本金組入額の減額項目として計上しているものです。

第2号基本金取崩額は33億円で、今出川校地整備事業に充当する大学今出川校地整備資金の取崩額です。

特定支出準備金取崩額は7億円で、屋内運動施設建設のための小学校への財政支援に係る準備金の取崩額および使途が特定された準備金の取崩額などです。

収入の部合計は484億円となり、寄付金、補助金、事業収入、資産運用収入などの増収および固定資産除却額の増加などにより予算に対して32億円の増加となりました。

支出の部

人件費は192億円で、帰属収入に占める割合(人件費比率)は46%となりました。補助金事業における職員採用見込み人数減などにより、全体では予算に対して2億円の減少となりました。

教育研究経費は143億円で、経常的な教育研究活動に要した経費です。

管理経費は17億円で、大学の維持管理に要した経費です。

繰入金金は7億円で、法人内諸学校への資金調達による繰入額が主なものです。

施設関係支出は69億円で、今出川校地整備事業や国際学院校舎建設事業などによる支出です。

設備関係支出は16億円で、教育研究用機器備品、図書などの固定資産取得に係る支出です。

当期固定資産受贈額は14億円で、同志社国際学院用地の取得額です。

借入金等返済支出は2億円で、償還計画に基づく計画分です。

前期末未払金は1億円で、前年度に取得した固定資産に係る未払金額の支払額を今年度の基本金組入額として計上しているものです。

第2号基本金組入額は、組入計画に基づき、今出川校地整備資金の20億円を組み入れました。

第3号基本金組入額は、寄付金および過年度から保有している準備金の一部を基金に組み入れました。

第4号基本金組入額は、法人全体の組入計算に基づき必要額を組み入れました。

特定支出準備金繰入額は12億円で、使途特定寄付金および研究費などの予算繰越額を決算において繰り入れたものです。

支出の部合計は499億円で、予算に対して8億円の増加となりました。

収支差額

収入の部合計から支出の部合計を差し引いた**当年度消費収支差額は15億円**の支出超過となり、学生生徒等納付金以外の収入の増加や教育研究経費の執行残などにより、予算に対して23億円支出が減少しました。なお、累積消費収支差額としては**306億円**の支出超過額を翌年度以降に繰り越すことになります。

借入金

借入金残高は、前年度末に対して2億円減少し、当年度末では**9億円**となりました。

自己資金の不足額

消費支出超過額は内部資金の不足額であり、借入金は外部資金への依存額です。したがって、この両方を合わせた金額が自己資金の不足額となります。

前年度末の不足額は311億円でしたが、当年度末は4億円増加して**315億円**となりました。

(本文中の金額については1億円未満を調整しています)

■収支計算書

2010年4月1日から2011年3月31日まで

(単位：千円)

収入の部			
科目	予算	決算	差異
学生生徒等納付金	30,145,000	30,186,700	△ 41,700
手数料	1,681,300	1,753,390	△ 72,090
寄付金	295,990	2,136,951	△ 1,840,961
補助金	3,881,330	4,114,659	△ 233,329
資産運用収入	869,340	956,741	△ 87,401
資産売却差額	384,620	385,782	△ 1,162
事業収入	585,400	714,034	△ 128,634
雑収入	720,000	738,347	△ 18,347
繰出金	393,890	627,466	△ 233,576
分担金	123,710	123,710	0
(帰属収入合計)	(39,080,580)	(41,737,780)	(△ 2,657,200)
当期固定資産除却額	1,919,920	2,454,745	△ 534,825
借入金等収入	0	0	0
当期末未払金	125,460	207,215	△ 81,755
第2号基本金取崩額	3,520,000	3,300,000	220,000
(基本金過年度組入額、未組入額合計)	(5,565,380)	(5,961,960)	(△ 396,580)
特定支出準備金取崩額	600,510	698,947	△ 98,437
[収入の部合計]	[45,246,470]	[48,398,687]	[△ 3,152,217]

支出の部			
科目	予算	決算	差異
人件費	19,376,380	19,210,367	166,013
教育研究経費	14,747,850	14,260,816	487,034
消耗品費他	11,463,170	10,966,843	496,327
減価償却額	3,284,680	3,293,973	△ 9,293
管理経費	1,588,930	1,692,008	△ 103,078
消耗品費他	1,440,980	1,544,111	△ 103,131
減価償却額	147,950	147,897	53
借入金等利息	19,720	19,720	0
資産処分差額	271,510	283,855	△ 12,345
徴収不能引当金繰入額	138,420	122,688	15,732
徴収不能額	0	12,459	△ 12,459
繰入金	900,000	715,127	184,873
予備費	115,000	-	115,000
(消費支出合計)	(37,157,810)	(36,317,040)	(840,770)
施設関係支出	7,009,720	6,856,714	153,006
設備関係支出	2,076,990	1,616,770	460,220
当期固定資産受贈額	0	1,418,761	△ 1,418,761
借入金等返済支出	206,080	206,080	0
前期末未払金	100,360	100,355	5
第2号基本金組入額	2,000,000	2,000,000	0
第3号基本金組入額	0	410	△ 410
第4号基本金組入額	119,800	119,800	0
(基本金要組入額、当年度組入額合計)	(11,512,950)	(12,318,890)	(△ 805,940)
特定支出準備金繰入額	352,830	1,218,172	△ 865,342
[支出の部合計]	[49,023,590]	[49,854,102]	[△ 830,512]

用語解説

● 収支計算書 ●

学校法人会計基準に基づく消費収支計算書においては基本金組入額を帰属収入から控除して表示しているため、収支の内容をよりわかりやすくするために、消費収支計算書に基本金組入計算に係る各項目をそれぞれ収入・支出の部に計上したのが「収支計算書」です。

● 基本金 ●

第1号基本金は、学校法人が、教育研究活動に供するため、自己資金により取得した固定資産の価額です。

収支計算書において第1号基本金組入額は、支出の部に取得した固定資産(施設関係支出、設備関係支出、現物寄付資産)の額を表示し、さらに過年度取得した固定資産に係る借入金等返済支出を表示しています。また、収入の部に固定資産取得に係る借入金等収入、固定資産売却による再取得価額などを表示しています。

第2号基本金は、将来取得する固定資産に充てるための資金です。

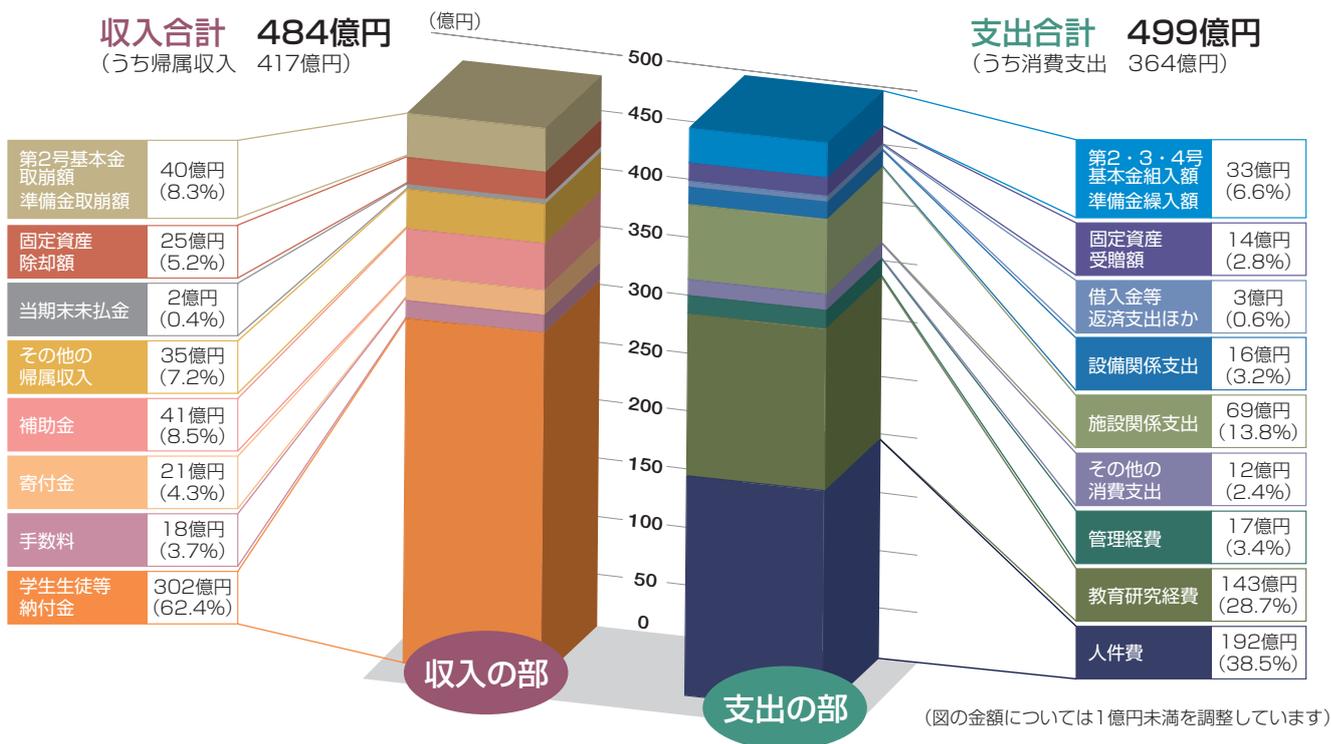
第3号基本金は、基金として継続的に保持し、その運用果実により教育研究活動の遂行を支援するための資金です。

第4号基本金は、恒常的に保持すべき資金として学校法人会計基準が定める額です。

収支差額の部			
科目	予算	決算	差異
(当年度消費収支差額)	(△ 3,777,120)	(△ 1,455,415)	(—)
消費支出準備金繰入額	0	0	—
消費支出準備金取崩額	3,110,100	1,758,398	—
[繰入取崩後当年度消費収支差額]	[△ 667,020]	[302,983]	[—]
[前年度繰越消費収支差額]	[△ 30,020,790]	[△ 30,948,899]	[—]
[翌年度繰越消費収支差額]	[△ 30,687,810]	[△ 30,645,916]	[—]

借入金			
科目	予算	決算	差異
[前年度未借入金残高]	[△ 1,134,770]	[△ 1,134,770]	[—]
当年度借入額	0	0	—
当年度返済額	206,080	206,080	—
[当年度未借入金残高]	[△ 928,690]	[△ 928,690]	[—]

■収支構成図



埋蔵文化財発掘調査の成果

「中世動乱期の相国寺」

烏丸キャンパス建設に先立つ発掘調査

を、2011年3～6月に京都市埋蔵文化財研究所と共同で行った。調査面積は約3,000㎡で、東半を京都市埋蔵文化財研究所が、西半を同志社大学歴史資料館が担当した。

調査地は、中～近世の相国寺北西部にあたる。相国寺は、1382年に足利義満によって創建された、京都五山の一角を占める当時最も権力をもった禅宗寺院で、室町時代における「日本のパチカン」ともいえる。また、戦国時代から江戸時代には「大

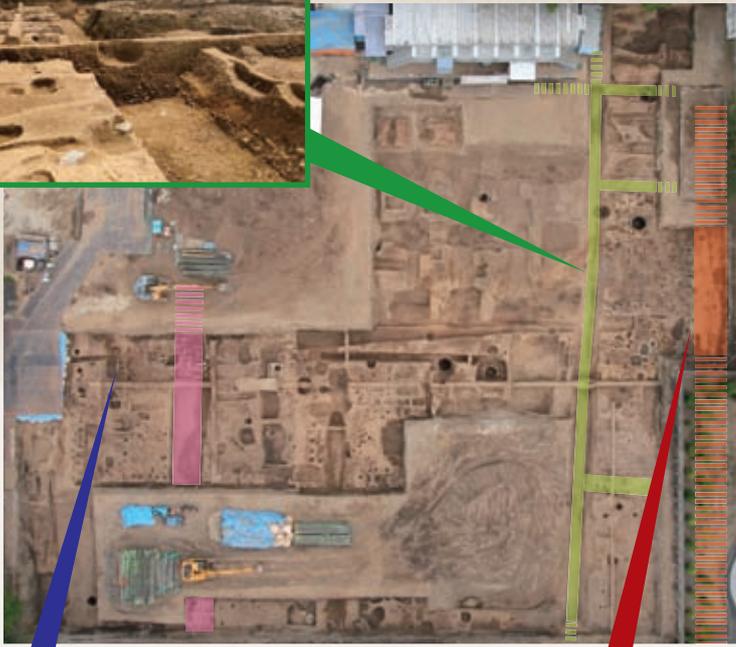
光明院」や「普廣院」（6代將軍足利義教の菩薩寺）などと呼ばれた塔頭の敷地でもあった。

調査では、応仁の乱から約100年におよぶ京の戦乱の時代に相国寺が要塞化していた様子が明らかになった。戦国時代（16世紀半ば）に建物ごとに築かれた防御用の堀の跡が見つかったことから推定される。

堀の跡は幅2～3m、深さ0.5～2m、南北方向に2本、東西方向に3本走り、堀で囲まれた幅30～45mの各区画には僧侶の住坊などがあったと見られる。戦国期の寺院で区画ごとの堀割が確認された例は、東寺など数例しかない。



16世紀の堀



普廣院仏堂の焼失瓦群



14世紀末の石敷道路

室町～戦国時代の相国寺の周辺には、將軍の邸宅「室町殿」や有力武士の邸宅があり、中世京都の政治の中枢であった。そのため、中世の戦乱で伽藍が何度も消失したことが『鹿苑日録』などの文献に記されている。また、16世紀の京都は、宗派対立から寺院が襲撃された天文法華の乱（1536年）が起ころなど混乱が続いた時期でもあった。見つかった多くの堀からは、このような戦乱期に寺を要塞化して守りを固めるなどの緊張した様子がうかがえる。

また、調査区西部では、15世紀の焼瓦を多量に含む溝が見つかった。普廣院仏堂の消失跡で、応仁の乱による戦乱の一端を示している可能性が高い。さらに本年3月まで行われていた今出川キャンパスの発掘調査でも見つかった14世紀末の礫敷道路がみつき、南北400mと長大な範囲に敷設されていることが分かった。創建期相国寺の規模を類推する上で重要な知見である。

遺跡現地説明会を開催

6月11日午後、一般市民向けに遺跡現地説明会を開催した。午前中の雨にもかかわらず、約550名と多くの見学者で盛況であった。特に好評だったのは、創建期相国寺の石敷道路を実際に歩く部分で、「義満さんと同じとこ歩いてるんやあ」と喜ぶ女性の姿が印象的だった。この説明会以外にも、近接する烏丸中学校や室町小学校からも総計約200名の見学を調査期間中

に受け入れ、地域社会の歴史を知る教材として活用していただいた。戦国時代の堀を見て歓声をあげる小学生の活気で、調査現場は和やかな雰囲気包まれた。



今出川校地の新校舎建設に伴う発掘調査のうち大規模なものはほぼ終わったが、インフラ整備に伴う小規模な調査は2012年まで続く。キャンパスが京の歴史を知るうえで重要な場所に建っていることを心にとどめ、その調査成果を今後のキャンパス整備に活かしていくことが大切だろう。今出川キャンパス新棟の一部には、復元遺構や遺物展示コーナーを設ける計画が進んでいる。新校舎でも京の歴史を体感してもらいたい。（歴史資料館）

新棟建設工事が着工

7月1日、烏丸キャンパス新棟建設工事の起工式が行われた。式典では、大谷實総長の式辞の後、参加者約50名が礎石に名前を書き、建物の柱下（埋めるジュラルミンケース）におさめ、工事の安全を祈願した。現在は建物基礎工事の中で、1年後の完成に向け、着々と建設事が進められている。



『新島八重と同志社』特設サイトオープン

― 創立者新島襄の妻・八重が 2013年大河ドラマ『八重の桜』の主人公に ―

6月22日にNHKから発表されたとおり、2013年の大河ドラマは新島八重の生涯を描く『八重の桜』に決まりました。会津若松出身の八重を主人公に、東北・福島に根づく不屈のプライドと、東日本大震災からの復興を目指す被災地への力強いメッセージが込められたドラマ制作が目指されるということです。

主人公の八重は、創立者・新島襄を支えた妻であることから、また、復

八重に関する研究は、学術的にも緒に就いたばかりで、今後の展開が期待される場所ですが、八重に関する情報を広く一般に共有・活用してもらえよう、『新島八重と同志社』と題したサイトを、大学公式ホームページに開設しました。八重の生涯や写真・関連資料紹介のほか、八重への様々な立場と視点からの想いを綴るリレーメッセージなどを掲載しています。さらに、本学とNHK大河

興支援を念頭に置いたドラマの意図に賛同する立場から、本学としても『八重の桜』を応援し、撮影や取材、裏付資料の提供などできる限り協力していきます。

NHKの正式発表後は、多くの校友や一般の皆さまからも様々なお問い合わせをいただくようになりました。八重の生誕の地である福島県や会津若松市、および京都府からも連携・協力の要請を受けています。

ドラマ『八重の桜』ドラマ班、福島県や会津若松市、京都府などとのコラボレーションの状況も、今後の進捗とともに順次伝えていく予定です。このサイトを通して、晩年「美徳以爲飾」（美徳以って飾りと為す）と書き残した八重のハンサムな生き方と、ひいては同志社の歩みの一端に触れてください。

● サイトコンテンツ ●

- *はじめに：最新のニュース
- *八重とその家族：八重の生涯、八重のあゆみ(年表)、夫・新島襄について、兄・山本覚馬について
- *八重と同志社：繋ぐ想い(リレーメッセージ)、過去の企画展、本学刊行物、参考資料
- *セレクションギャラリー：肖像写真や画像などを紹介
- *同志社関連施設 … など

<http://www.doshisha.ac.jp/yae/index.html>



新島八重

1845年12月1日、会津藩の砲術師範であった山本権八・さく夫妻の三女として誕生しました。戊辰戦争で会津が戦場となった時には断髪・男装して会津若松城に籠城し、自らスベンスアー銃を持って奮戦しました。会津藩の敗戦から3年後の1871年、京都府の顧問となっていた実兄・山本覚馬を頼って上洛し、同じ頃に覚馬の元に入りしめていた新島襄と出会いました。襄はアメリカの養母であるA・H・ハーディー夫人への手紙で「彼女は見た目は決して美しくはありません。ただ、生き方がハンサムなのです。」と書き送っています。2人は1876年1月3日に結婚。京都初の日本人同士のキリスト教式の結婚式を挙げました。夫の了解の下での行動ではあったものの、傍目には夫をかきかき、車にも夫より先に乗る姿が世間から悪妻と評されましたが、欧米流の生活スタイルが身につけていた襄と、男勝りの性格だった八重は似合いの夫婦でした。1890年の夫の死後は篤志看護婦となり、特に日清戦争、日露戦争で傷病兵の看護にあたりました。1932年6月14日永眠。葬儀は「同志社の母」として社葬されました。

